

レポート

International Conference on
Chemical and Biological Thermodynamics に出席して

近畿大学理工学部 木村隆良

表記会議がIUPAC、インド科学アカデミーおよびGuru Nanak Dev 大学の共催で1997年1月5日から1月8日までインド、アムリトサル市Guru Nanak Dev 大学で開催された。インドでの熱力学的研究のレベルの高さに比べて、国際的な学会での発表が少なく特に若い世代の国際交流の機会がほとんどない原因は主として経済的問題であり、IUPAC 熱力学委員会決議にしたがって1993年I. Wadsö 教授がNew Delhi 市でInternational Conference on Thermodynamics of Solutions and Biological Systems を開催し大成功を収めたことに引続いて行われた。組織委員長はJain 教授 (Punjab 大学) で実行委員長はLark 教授 (Guru Nanak Dev 大学) で国際組織委員として、委員長I. Wadsö 教授 (Sweden)、委員DVS Jain 教授 (India)、L. Rouquerol 教授 (France)、F. Schwarz 教授 (USA)、T. Kimura (Japan) が協力してプログラムを作成した。

E-mail を利用した会議で何度となく十分に検討され、最終的には南米を含む全ての大陸 (旧ソ連を除く) から熱化学に関係する科学者の協力が得られた。インド側の準備も大変なもので予め到着便、列車の調査を行い空港と駅まで実行委員長のLark 教授自らが出迎といった丁寧なものであり、会場とホテルは少し離れていたがスクールバスが準備されており、参加者には地元実行委員の丁寧なおもてなしであった。

最終的な外国からの参加者は前回 (1993年NewDelhi) の約半分であったがコロンビア、ハンガリー、中国からの参加もあり幅広い国から研究者の支援が得られた。インドを除くと日本は最も多い参加者数であった。またインドは大きい国であるので国内の参加者を集めるのも大変な仕事でJain 教授の尽力の後が伺え、3日間汽車に乗ってきたと話されていたインドのアクティブな方が居られたが、インド国内からは前回の約2倍の120名の参加があった。

気候も予期していたよりも厳しくなく快適な会場で、強いインドアクセントの英語ではあるが非常に活発な討論が行われた。討論が激しくなり多くの人が同時に発言し始め、会場が騒然と成り、終には「座長に発言順を決めて貰って討論をしよう」など大きな声が上がるとの場面もあり十

分討論が行われ、時間切れ延長戦はロビーで打って変わった物静かな意見の交換が長い間続いていた。

日本からは上平初穂夫妻 (理研)、河村秀男 (新居浜高専)、田村勝利夫妻 (阪市大)、松尾隆祐 (阪大)、木村隆良 (近畿大) (敬称省略) の5名参加者と同伴者2名が出席された。今回の日本からの同伴者は御自身が参加者として出席されてもよい方で若干の同伴者プログラムも準備されていましたがほとんど講演会場で講演を楽しんでいたようで他の外国の方とは異色な同伴者であった。

セッションはMultilayer Adsorption, New Techniques, Thermodynamics of Biological Molecules I, Theoretical Methods, Thermodynamics of Biological Molecules II, Polyelectrolyte Solutions, Thermodynamics of Biological Molecules III, Phase Transitions, Thermodynamics of Biological Molecules IV, Solution Chemistry, Plant Metabolism/Solid Science, Amorphous Material/Micelles, General Topics, Adsorption Phenomena, Biological/General Topics, Environmental Chemistry, Biological/General Topics, Adsorption, Miscellaneous, General Topics の21のオーラルセッションと4のポスターセッションに別れ、それぞれのオーラルセッションでは招待講演と一般講演が行われた。日本の参加者は正月の大事な行事



Guru Nanak Dev 大学で行なわれた開会式風景



Guru Nanak Dev 大学正門

を献上していただき、4つのセッションでセッションチェアマンを勤めるなど、この分野における国際貢献度は欧米に遜色ないことが伺える。

セッション7Aでは松尾先生が“Low Temperature Thermal Properties of Amorphous Materials”の題で招待講演をされ、セッション8Bでは“Multistable Thermal Transitions of Proteins-DNA-Bonding Domain of the MYB of Coprotein”の題で上平先生が招待講演をおこなわれた。セッション10Bでは田村先生が“Excess Thermodynamic Properties of the Aqueous Solution of Ethoxyethanol”, 川村先生はセッション2Pで“Solubilization of ω -Phenylalkanols in Gel and Liquid Crystalline DPPC Liposome Membranes”, セッション11Bでは筆者が“Excess Enthalpies of Some Nitrils + Methyl Methylthiomethyl Sulfoxide, + Dimethyl Sulfoxide at 298.15 K”で研究結果を報告した。特に上平先生の講演では座長のA. Kumar教授が今会議での唯一の女性招待講演者であり、日本の学会などよりも多くの女性科学者の参加者が目立つ今会議で若い女子学生の目標になるなどと特にコメントされ、分かりよい講演に続いて活発な討論行われた。

2日目の午後にはシアー教の総本山 (Golden Temple) を

拝観し、儀式に則ってお茶とお供物を戴いた。夕方には慌ただしく会場に戻りまたセッションを開始するといった非常に厳しいスケジュールであった。筆者がびっくりするのは植民地時代のなごりとの話であったがカルチャーイベントなどではとにかく挨拶の数と量が多いことであった。しかし地元の力の入れ様も相当な物でTV局の取材や地方紙4紙に大きな写真入りで今会議のことが掲載されるなど地元の期待も大きいことが伺えた。

最終日にまとめとしてLamprecht教授を座長として、Goldberg, Beezer, Jain, Kumark教授が壇上にあがりパネル討論形式による総括が行われた。今会議は大成功であったこと。アブストラクトなどをほとんど間違いなしにマンインタフェースで全部打ちかえるなど、大変な準備と丁寧な歓迎に感謝が述べられた。また今回の反省としてポスター発表の時間が少なかった。会期中掲示すべきである。SI単位を使用していない図などがあった。ロシアからは多くのアブストラクトを送ってきたが全然参加が得られなかった。また研究環境について西側が研究器材、研究費、人材などの点で如何に協力できるか?特に使わなくなって廃棄した器材でも十分使用に耐えるものがありイギリス国内では回覧しており、援助物資になっているので積極的に申請すべきである。いくつかの大学研究所が地方で共同研究センターを設立する。スイスでは若い人のための夏季学校などが開校されているなど多くの情報が提供された。インド国内に学会を組織しこの方面の年会を持つこと等が提案され今後の発展が期待される。少し外国人が少なかったせいかもしれないが筆者の4年前でのNewDelhiの会議に出席したときの印象とは異なり若い研究者が活発に討論に参加し、目を見張る変化であると感じられた。

今回の実行委員長のLark教授は30年前日本に留学されていたことがあり、日本語でご挨拶を戴きびっくり、また主催者側の行き届いた心配りで日本からの参加者がNewDelhiで大変お世話になったIndian National Science AcademyのM. S. Pelia氏、RambaxyのN. S. Dhar博士に紙面をお借りして心より感謝いたします。参加者名簿は上平先生から戴きました。お礼を申し上げます。